山姥

（角倉素庵筆）

京乙
378
別冊
5-6
2-2

国立国会図書館　タイトル『山姥』 請求記号 寄別5-6-2-2
ガラス使用

京乙
378
別圖
5-6
2-2

国立国会図書館　タイトル『山姥』 請求記号 寄別5-6-2-2

ガラス使用

山姥

帝國圖書館

国立国会図書館　タイトル『山姥』 請求記号 寄別5-6-2-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『山姥』　請求記号 寄別5-6-2-2

ガラス使用

三成海道國乃末なる海里とんぢ
とし故に壹さらるぞしひ河に
もはまに入わらく 軍刊 清恵以程
に載後成中に城川に清美に
て以程是に清坐りひて於て
乃ち清横弥を清ゆ
新まそん 巳刊 実やつまに而清西

方清浄去て十万に住むとりや是
ちて又所隠来道乃和海なる所是
ぬ也ろちゐしと面しむに第わ
ん面しどそも晩行ちゐ旅なる所
そこ業もみをいへ所にとしぬ
ちまゐちたしまそ第わ以
面しゞ見えるへしそこたひりん

（半カ）あらしのきやう昔まし女日ふ
てくりの俤は昔てしのくりたる袖の雫
住りなれしき（ミケチ上カ九）なりふるく旅人は宿
（合ヒ）案しきさまなる（カ）ぬ是たもあを
ろたる山とてバ里さきあるわ
日数昔てくりなれたるわらくりの菴は
て一夜を明さす勢竹ひくん

あらし姥しやふりはは日は流れ行お
後をたてすしてはおもふ案しふ
けるまてはハ（ミケチ上カ九）ひとよりはひたる法やと
案しけるすれ（トヒ）夜分思ふ事あ
里に（一カ）山姥乃ことは流一ぬしいひ
てきまてせ勢竹へ年月の上皇
なりわ鄙流思世とおもふ再し

国立国会図書館　タイトル『山姥』 請求記号 寄別5-6-2-2

ガラス使用

吳の相はなる山姥をたちめ河東
もしかるにしめさし所てしり其
八山姥とは山に住鬼女とこそ
さまひにもゆくてゝりん 鬼女と
たちを取たる鬼とやどりし鬼取
里せ人なりわとも山にしも女取
しをまつりの身好上にてしち

さしかりけれやどしころ山は
りしさしをたまつぐと流星好
露ほと成活心にまうけ行ぬ
怖れに其里たわ鬼を極めぬ
なるべし世情万達なぬ毎を
昇る氏一の乃有なしけれやぎり
たちわしたる身をもとつしび無

国立国会図書館　タイトル『山姥』　請求記号 寄別5-6-2-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『山姥』　請求記号 寄別5-6-2-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『山姥』　請求記号 寄別5-6-2-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『山姥』　請求記号 寄別5-6-2-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『山姥』　請求記号 寄別5-6-2-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『山姥』　請求記号 寄別5-6-2-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『山姥』　請求記号 寄別5-6-2-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『山姥』 請求記号 寄別5-6-2-2

ガラス使用

如とかはれど目前つゝ来れとも
称正一ぬとゝゑる時にはぐさ見
宮ゆきまゝに仏法あまたを世法
あれ炊煙あまたを学拯あれ佛
あまたを宮主なる宮主あれは
山姥も下る柳をゑ花を
くれなみ行ひ行ひ梅人ゐる

にあらふるすゝ時にはを山姥法
樵路に通ぬ美はかけやれ世を
おもしろ肩をかし月読に
山を出里を送る柳もあれ又
あと時を殘姥のぶりをたゝ大法
新宮にのぞ枝法学をゝる里
防蹟なる宿に男をとき人成

国立国会図書館　タイトル『山姥』 請求記号 寄別5-6-2-2
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『山姥』　請求記号 寄別5-6-2-2

ガラス使用

一河は流皆是他生法界なり
ぼしてやわらぬを夕月の淳
世をめくる淳一よりも狂言綺語
乃是はくに讃佛乗法因り
かしぞ所なる幾れしや脇
かてる海郭山は 鈍 秋を木末に
咲かと待し 三テ上 八年を見て山田に

鈍 秋をさしやゆきまけをしたる
て 三テ上 月見る果てよりとやすめく
里 鈍 外にさしえけ志て秋法
雲落 三テ上 雲を誘ひて 上ハ 山田 鈍 回
里して 一ハ 秋回をいかまとぬ家
執好雲はぬ蓋法もはてぶ山姥と
なまれる鬼女の横見るやしや

乙京
378
別置

国立国会図書館　　タイトル『山姥』　請求記号 寄別5-6-2-2

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『山姥』　請求記号 寄別5-6-2-2

ガラス使用